大阪毎日新聞の先史時代遺跡記事―二重口縁壺形土器を中心に―

文珠　省三
元阪歴史博物館運営課長（学芸員）

はじめに

タイトルの二重口縁壺形土器は河内国府遺跡出土品として重要文化財に指定されている資料の内、附土器残欠 6 点とされている中の 3 点を指す [(1)]。（図 3）これまで重要文化財指定を受けた国府遺跡出土資料の中で古墳時代前期資料として学史上でも、弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年研究においても特異な前期の二重口縁壺形土器として注目をされていた。今回、この資料について毎日新聞の発掘報告記事を中心に検討し、付随する他の資料とともに出土状況等を明らかにし、検討を加えたい。

調査の経緯

国府遺跡は明治 20 年代（1892 年、明治 25 年）に、その存在が知られるようになり、第一次世界大戦中の 1917(大正 6) 年から、京都大学などにより発掘調査が開始され、都合 10 回に及ぶ調査がおこなわれている。第二次大戦後は、大阪市立大学の研究グループや大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会などにより、断続的に発掘調査が実施されている [(2)]。

今回報告に関係する毎日新聞の発掘調査は、1917(大正 6) 年 10 月 1 日～ 15 日と 1918(大正 7) 年 4 月 11 日～ 5 月 10 日の 2 回おこなわれている。報道担当であった、岩井雍南によれば京都大学の発掘を第 1 回、次に鳥居龍蔵の発掘を第 2 回、第 3 回発掘が毎日新聞のおこなった 1917(大正 6) 年 10 月の調査であり、1918(大正 7) 年 4 月から 5 月にかけておこなわれた調査が第 4 回目となる [(3)]。

1917(大正 6) 年 10 月の毎日新聞の発掘調査

調査区は京都大学発掘区域・鳥居龍蔵発掘区域に隣接した場所に設定されている。（図 1）

発掘区域の層序は、新聞紙面から読み取ると表土層、包含層 (黒土層) 上層、黒土層に大きく分層できることが認識されている。この黒土層から多くの土器などが出土している。この層は、調査区西南辺で厚さ約 0.5 m、西北辺で約 0.7 m、東端で約 0.8 m堆積していることが記されている。そして図 2 に示した、調査区画の東端から南辺に接した一角に、記事を引用すると「東端から南邊に接した一角、幅二尺長十三

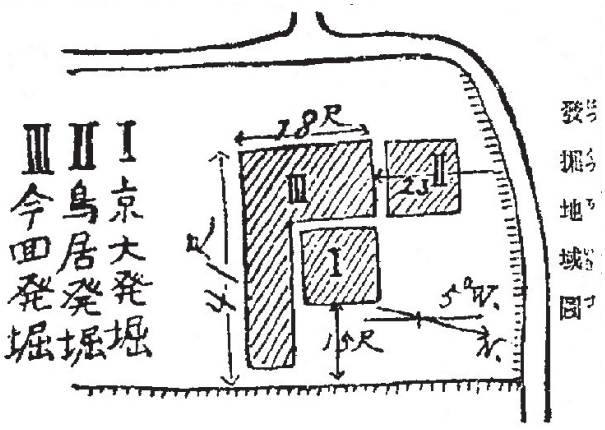


図 1　発掘地域図

尺余の部分は此の包含層遽に平均を破つて厚く一尺の堆土を除いて以下更に五尺八寸まで掘つて見ても尚砂利粘土の地礎に達することが出來ない」区画の存在が確認されている[(4)]。メートルに換算すると、この区画の大きさは、幅約 0.6 m、長さ約 8 mに及ぶ。そして約 0.3 mの表土層の下に深さ約 1.8 mまで掘っても砂利粘土 (地山) に達しない黒土層があると記されている。（図２）

そして、第 3 回発掘調査に関する 10 回目の記事において

「今回発掘の鍵形区域の東南隅（幅二尺長さ十三尺強）の一区画であって前述の通り、此の黒土層が他の部分とは非常に厚層であってこれからは地下（堆土を除き）二尺の処から二尺の圧さの土器層をなし上層部よりも反って多く発見する ― 地下（堆土を除き）二尺以下といへば他の部分から見れば人骨所在線下となる ― シカモ其の土器は赤焼薄手の無紋土器が比較的多く他の部分の様に多く有紋の土器を交へない、唯一つ大形で厚手の有紋（円点及刷毛目）の土器片を此の区域の比較的上層部から発見した事位が珍しい例であつた」[(5)]

と報告されている。この記事は、先述した調査区の東南角の幅約 0.6 m・長さ約 8 mの区画においては、表土下に層の厚い黒土層が 2 層あり、その黒土層は上面から約 0.6 mの層、更にその下部に約 0.6 mの土器層があったことを記している。

この記述から、表土層下の黒土層は、多量の土器が含まれた層と含まれていない層に分かれ、土器層とも言われる下部の黒土層から「大形で厚手の有紋（円点及刷毛目）の土器片」が出土したことが記されている。この土器が今回報告する二重口縁壺形土器の一つであると考えられる。

「大形で厚手有紋（円点及刷毛目）の土器片」は図 3 の 0361・0362、写真 1 ～ 3、 5 ～ 9 の土器の 2 点のうちの何れか 1 点に該当するものと考えられる。そしてこの土器の内面には、

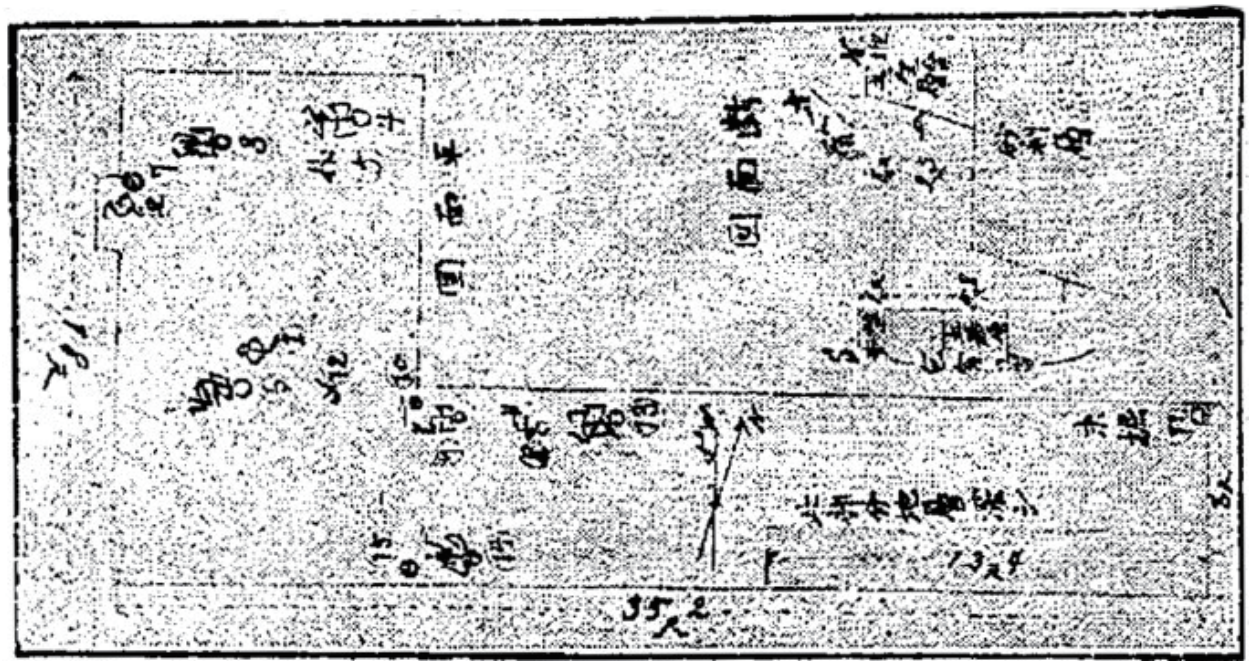


図 2　第 3 回発掘トレンチ平面略図

「河内、国府字衣縫　第四回発掘　大正七年四月
第三回第四号■（（地ヵ））ヨリ十尺■■■■■■■■
二片トナリテ出ツ
河内国府字衣縫　第四号発掘地　第三回、六年十月十一日」
※文字のあることは推定できるが不明なものは■で表した。
と朱書きされている。

口縁部あるいは壺の破片という記述は記事にはないが、この朱書きから第３回発掘の 10 月 11 日に出土していること、また、「有紋（円点及刷毛目）」の記載が手がかりとなり、図３の 0361、写真１～３の土器と確認することができ、接合の痕跡から２片に割れた状態で出土したことも確認することができる。

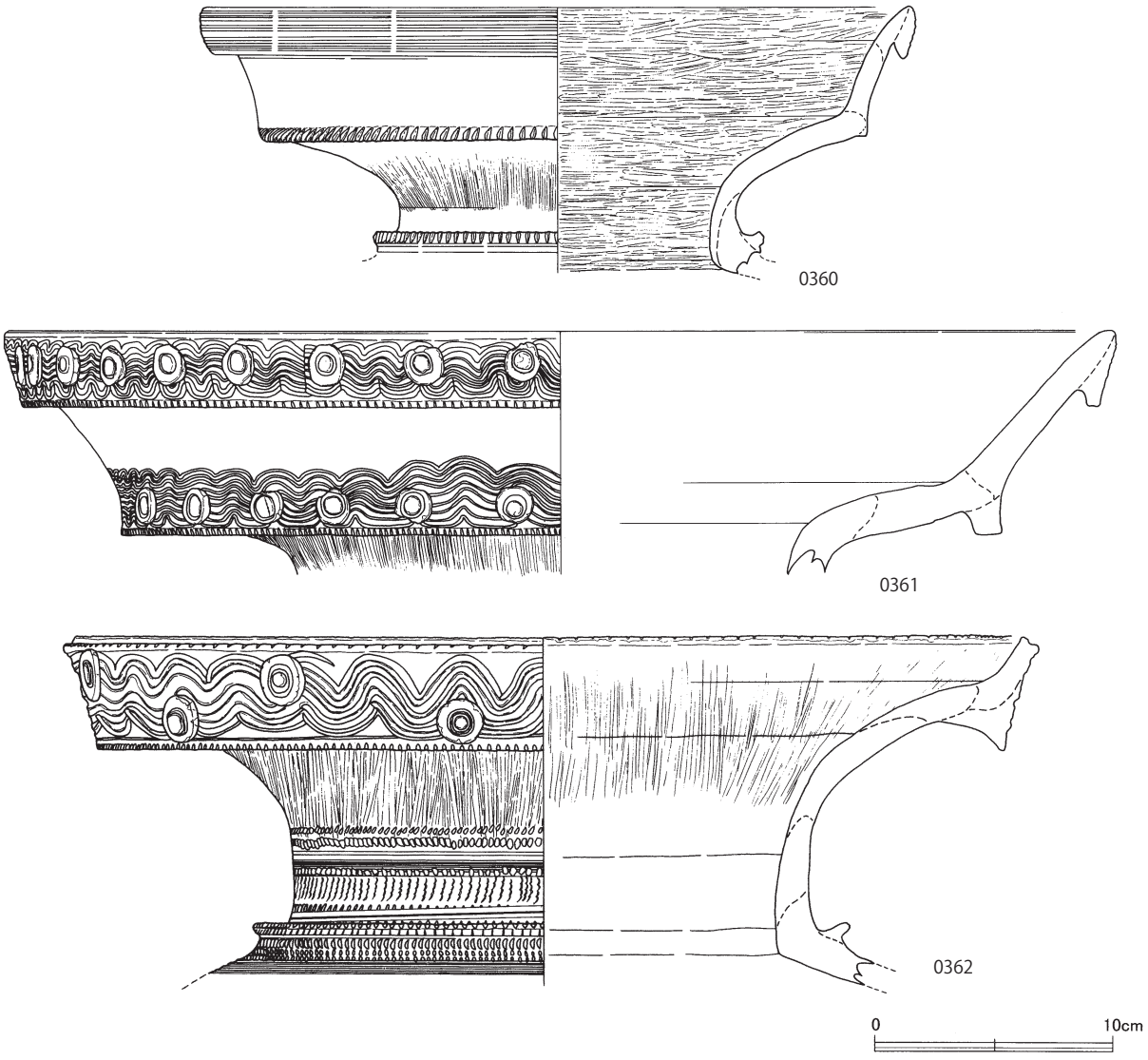


図３　二重口縁壺形土器　実測図

先に述べた「土器層」とも言われる黒土層からは「赤焼薄手の無紋土器が比較的多く」出土し、そして「大形で厚手有紋（円点及刷毛目）の土器片」は「此の区域の比較的上層部から發見した」と記されている。

1918(大正 7) 年 4 月から 5 月にかけての発掘調査

第 4 回の発掘調査は 1917(大正 6) 年 10 月の第 3 回の調査区に接して A 地点約 80㎡、B 地点約 56㎡の調査区域が設定され、1918(大正 7) 年 4 月 11 日から 5 月 10 日の期間に実施されている[(6)(7)]。（図 4 ）

第 4 回の調査においては、第 3 回の調査で明らかになった「東南隅（幅二尺長さ十三尺強）の一区画」が当初から注目され、8 月 5 日の「河内国府第 4 回発掘調査 (4)」において、この区画は第 4 回の調査区にも連続するすることが確かめられ、人為的な竪穴として認識し、図化されている[(8)]。

この竪穴と考えられた遺構は、調査区の北壁に接したところで幅約 4.8 m、南壁では幅約 4.5 m を測る。深さは約 2 m、竪穴状遺構の東壁と西壁は掲載された図（図 5 ）から見ると約 1.1 mを測る。また、この竪穴状遺構を観察した記述に「西壁は稍斜面をなして東壁は砂利層から成れると異って粘土に少量の有機質黒土を混じたものから出来て居る」とあり、東壁は地山を削って造られ、西壁は人為的に造られたことが明らかされている[(9)(10)]。

次に出土遺物については、底部から「木炭屑並びに木の炭化せるものが多数に混入せるを認める」とある。そして、「昨年十月第三回発掘に於て同じ此の竪穴北接の部分から発見した赭色有紋大形

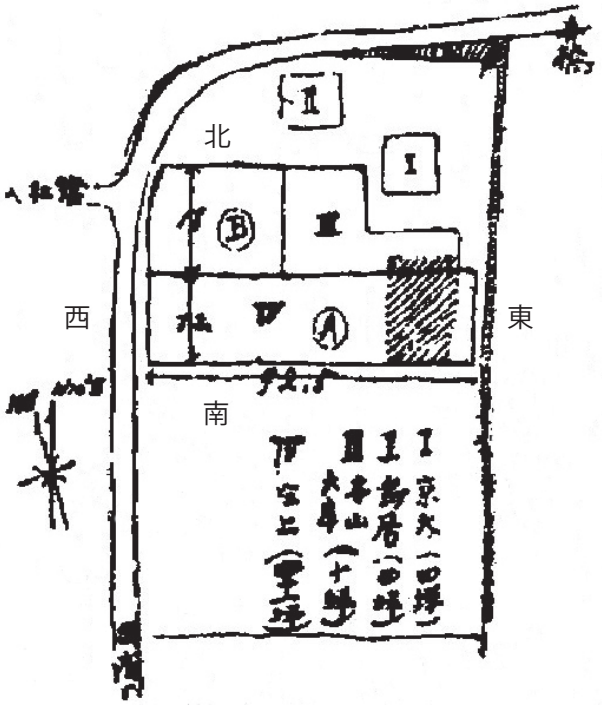


図 4　第 4 回発掘トレンチ平面略図

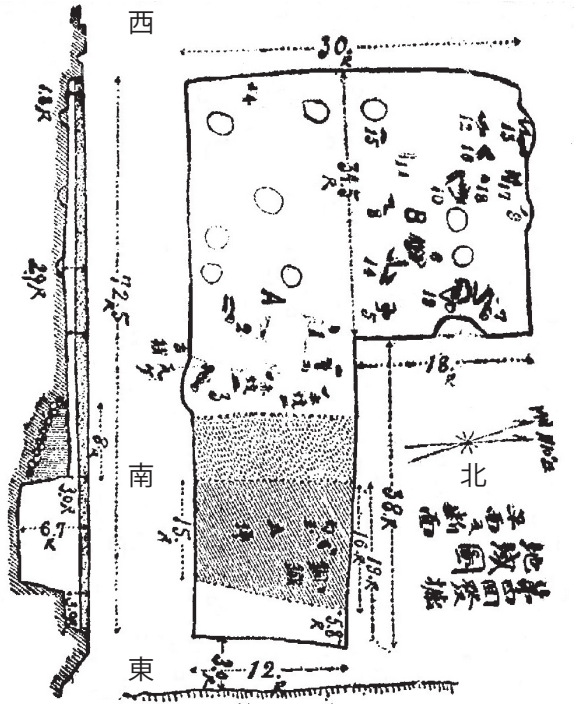


図 5　調査区東西断面図

土器の破片と数尺の距離ある塲所で今回の発見した其の種の破片とを試みに合して見ると甘く結合した」という記載があり、この土器の残された朱書きの文字を裏付けている [11]。

この他、この遺構の性格を考える手がかりとして「この壙内の有機土層中には他の有機土層のそれに反して河原石を混入せること少からず殊に上層及下底に其の夥しきを認める、何故であるか、石器の発見は上層には多く存在して居つたが下るに従ひ其の数を減ずる」と記述されている [12]。

実見していないので不明な部分もあるが、竪穴の遺構には黒土層と呼ばれる有機土層が堆積し、水の流れた痕跡はない。そこに川原石が存在したとすれば、この場所まで運ばれ、使用されたものと考えられる。このことから何らかの遺構のあったことが想定され、この遺構と二重口縁壺形土器の関係を考える上で重要な意味を持っていると思われる。

以上、二重口縁壺形土器の出土状況を 1917(大正 6) 年 10 月の毎日新聞の発掘調査報道、1918(大正 7) 年 4 月から 5 月にかけての発掘調査報道からみてきたが、調査記録から確認できる土器は本山考古資料番号 0361 のみで、他の 0360・0362 は確認できなかった。

二重口縁壺形土器の観察記録

観察記録は、関西大学博物館『博物館資料図鑑』にある観察記録を転載した [13]。

本山資料 0360 は二重口縁壺である。外反するロ縁部 註 1 はほぼ完存し、頸部から肩部への屈曲部まで遺存する。法量は口径 29.70cm、残存高 10.30cm である。器面調整について、外面からみるとロ縁部はヨコナデ調整のみであるが、頸部ではヨコナデの後に縦方向のヘラミガキを施す。内面は肩部まで丁寧で細緻な横方向のヘラミガキ調整が観察できる。器面装飾としては、ロ唇部に凹線が 7 条、そして口縁部から頸部への屈曲部、頸部から肩部への屈曲部それぞれに刻目突帯が貼付されている。製作技法からみると通常の広口壺の口唇部に当たる部分 (擬口縁) の上方に粘土帯をさらに付加する形で成形されている。そして垂下口縁気味に粘土を貼り付け、凹線を施している。

本山資料 0361 の二重口縁壺であり、土器内面には「河内国府字衣縫第四号発掘地第三回六年十月出土」「河内国府字衣縫第四回発掘大正七年四月第三回第四号ョリ十尺□□□□□□ヨリ二片トナリテ出土」の朱書がある。器形は外反する広ロ壺ロ縁部にやや外傾する二重口縁部が付加されており、ロ唇部および広　口壺ロ縁部と二重口縁部の接合線 (段) にはそれぞれ粘土帯が貼付され、紋様帯が形成されている。法量は復元口径 46.4cm を測り、二重ロ縁壺の中でも大形の部類に属する資料である。器面調整は頚部外面では縦方向のヘラミガキを施しているが、その他は内外面ともにヨコナデで行っている。器面装飾は前述した 2 箇所の紋様帯で波状紋と円形浮紋＋竹管紋のセットが観察できる。波状紋は 7 条一単位であり、1 条の幅は 1mm 前後である。2 箇所の紋様帯の下端部には、刻目を施すところに 362 との共通点が見出せる。また、下位の紋様帯の貼付突帯が欠損している部分では、擬ロ縁が明瞭に遺存しており、二重ロ縁壺の製作技法を考えるうえで重要な資料である。

本山資料 0362 は二重ロ縁壺である。器形は通常の広ロ壺のロ縁部に粘土帯がさらに

付加され短く外傾した二重口縁を呈する。広口壺口縁部と二重口縁部の接合部線(段)には下方に粘土帯が貼付され、紋様帯を形成している。法量は復元口径 39cm、残存高 14.60cm を測る。器面調整は、頸部外面上半と内面上半がヨコナデの後、縦方向のラミガキ、その他の部分はヨコナデ調整のみが観察できる。この土器はいわゆる加飾壺と考えられ、装飾紋様としては波状紋・円形浮紋＋竹管紋・刺突紋・直線紋などが施紋される。前述の口縁部の紋様帯についてみると、幅 1 ～ 2 mm の太い沈線 5 条を一単位とした波状紋の上に円形浮紋を貼り付け、上下端部には刻目が施されている。また、肩部には上外方に突出する突帯が貼付されており、突帯の上下面両方に刻目が観察できる。製作技法は、擬口縁と考えられる接合痕が断面に観察できることから通常の広口壺の口縁部に粘土帯が付加される形を採る。

以上、国府遺跡から出土した 3 点の二重口縁壺についてみてきたが、その胎土には直径 0.5 ～ 1 mm の角閃石・雲母などを多量に含み、また暗茶褐色系の色調を呈することから生駒山西麓産粘土を用いて成形されたことが窺える。

二重口縁壺は畿内第Ⅴ様式の後半には出現し、庄内式期には加飾化・大形化が進行する。米田敏幸氏の研究 (註 2) によれば、庄内式期Ⅱで装飾性が増すが庄内式期Ⅲではすでに装飾性が薄れはじめる。そこで 3 点の土器の装飾性が高い点や二重口縁部がそれほど外反しない点から米田氏の庄内式期Ⅱ 、寺沢氏の庄内 2 式、つまり庄内式古相に位置づけるのが妥当であろう。またいずれも大形である点に注目できる。これらに近似する法量をも二重口縁壺は少なく、類例としては奈良県桜井市纒向遺跡 (註 3) 東田地区南溝 (南部) 中層、奈良県磯城郡矢部遺跡 (註 4)SD ― 308E 例が挙げられるが、これらから類推すると 50cm を超える器高が推定される。加飾壺である点も勘案すれば、祭祀もしくは墓葬に関連して供用された可能性が高いが、二重口縁壺の様相は無紋のものと装飾をもつものが共存するなど、なお不明な点が多く今後の検討課題であろう。　　(深野信之)

註 1 土器細部の名称については、『矢部遺跡』の例に従った。寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986 年

註 2 米田敏幸「2 土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究第 6 巻土師器と須恵器』雄山閣出版 1991 年

註 3 石野博信・関川尚功『纒向』桜井市教育委員会 1976 年

註 4 註 1 文献。

以上、二重口縁壺形土器の観察文を引用した。観察から導き出されたこの土器の所属する時期については、妥当な位置づけで、筆者の見解とも齟齬はない。ただ、近年の二重口縁壺形土器の研究と照らし合わせると庄内式の古段階から中段階の一つ新しい時期のものとも考えられる (14)。

また、口縁部から想定される土器の大きさでは、特に本山資料 0361 は復元口径 46.4 ｃｍを測る。一般的に同時期・同タイプの土器と比較するとかなり大きく、特殊な用途に用いられたのではないかと考えられる。

まとめ

これまで重要文化財に指定された本山考古資料の内、古墳時代前期の二重口縁壺形土器は、資料そのものだけを対照として扱われ研究されてきた感がある。今回のプロジェクトにおいて大正期の毎日新聞の発掘調査報道記事と照らし合わせて対象とした土器を調査することにより、報道記事では竪穴と呼ばれる何らかの遺構内より出土していたことが明らかになった。

また、竪穴の遺構内には多量の川原石が入っており、これは持ち込まれたものであることから竪穴と合わせて何らかの遺構を形づくっていた可能性がある。また、3 点の二重口縁壺形土器の内、復元口径 46.4 cm を測る本山考古資料 0361 はあまり類例のない大型の壺になると考えられ、この他多量の同時期と考えられる土器が出土していることから、何らかの遺構が形作られ、祭祀などがおこなわれていたのではないかと考えられる。

今回、資料として翻刻した発掘調査報道は、単なる報道のための調査ではなく考古学における研究姿勢を持って調査に望み、その成果を報道したものであった。

調査地の地形の把握、地形に沿った層序の把握と記事での説明、また、発掘調査の経過をよく観察し、遺物の出土地点と層位の関係など、当時における考古学の基礎を学んでいたことが記事から伺うことができる。

今後、国府遺跡の発掘調査でもたらされた本山考古資料については、更に発掘調査報道記事に照らし合わせ詳細な調査と研究が必要であると考えられる。

註

(1) 重要文化財登録番号：第 268 号

(2) 米田文孝「河内国府遺跡の意義と遺物」2006 年 p 1

(3) 岩井雍南 1917(大正 6) 年 10 月 16 日「河内国府遺跡調査 2 遺跡の地形概観」毎日新聞

(4) 岩井雍南 1917(大正 6) 年 10 月 17 日「河内国府遺跡調査 3 一般の出土状態」毎日新聞

(5) 岩井雍南 1917(大正 6) 年 10 月 17 日「河内国府遺跡調査 10 土器の発見」毎日新聞

(6) 岩井雍南 1918(大正 7) 年 8 月 1 日「河内国府第 4 回 発掘調査 1 世界的大遺跡の発掘」毎日新聞

(7) 岩井雍南 1918(大正 7) 年 8 月 2 日「河内国府第 4 回発掘調査 2 第 4 回発掘地域」毎日新聞

(8)(7) に同じ

(9) 岩井雍南 1918(大正 7) 年 8 月 5 日「河内国府第 4 回発掘調査 4 人為的の竪穴」毎日新聞

(10) 岩井雍南 1918(大正 7) 年 8 月 6 日「河内国府第 4 回発掘調査 5 所謂竪穴内の遺物」毎日新聞

(11) 岩井雍南 1918(大正 7) 年 8 月 7 日「河内国府第 4 回発掘調査 6 累々たる完全な土器」毎日新聞

(12)(11) に同じ

(13)『博物館資料図録』関西大学博物館 1998 年 p49-51

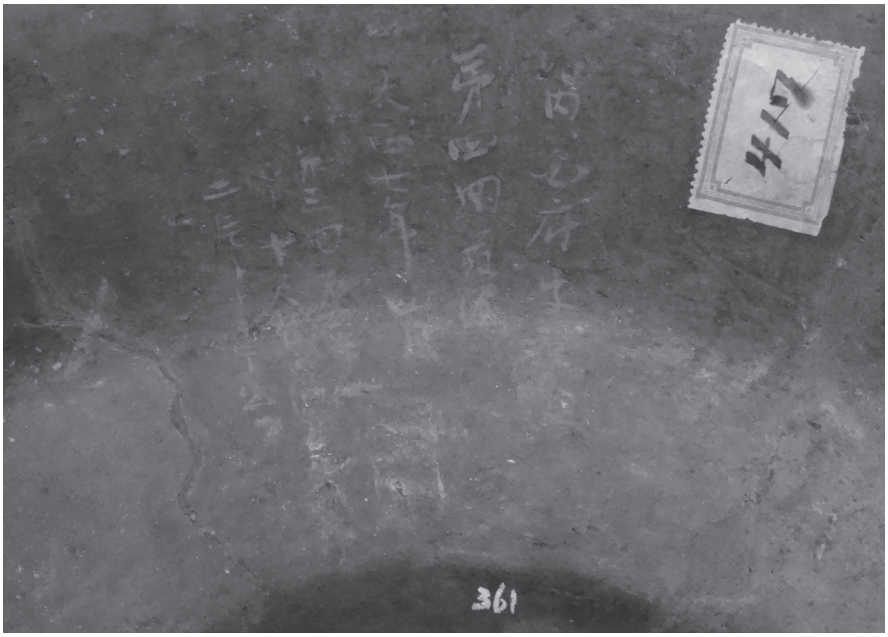
(14) 杉本厚典「二重口縁壺の編年と分布－河内地域の二重口縁壺の検討を中心として－」『大阪文化財研究所研究紀要』第 15 号　2013 年 p9-13



写真１　本山考古資料 0361　二重口縁壺形土器



写真２　本山考古資料 0361　口縁内面



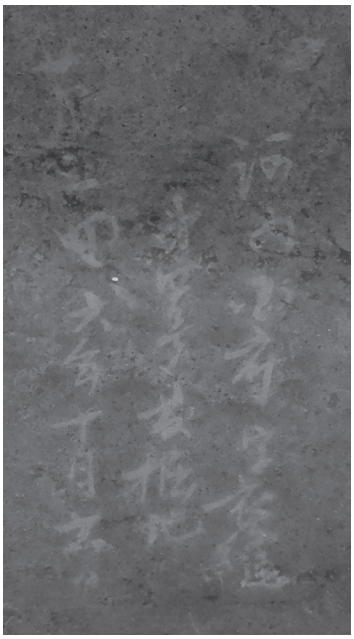


写真３　本山考古資料 0361　口縁内面朱書



写真 4　本山考古資料 0360　二重口縁壺形土器



写真 5　本山考古資料 0362　二重口縁壺形土器



写真６　本山考古資料 0360　口縁内面

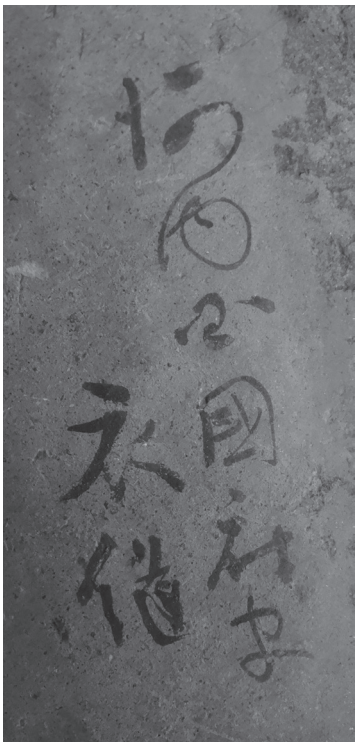


写真７　本山考古資料 0360　墨書



写真８　本山考古資料 0362　二重口縁壺形土器

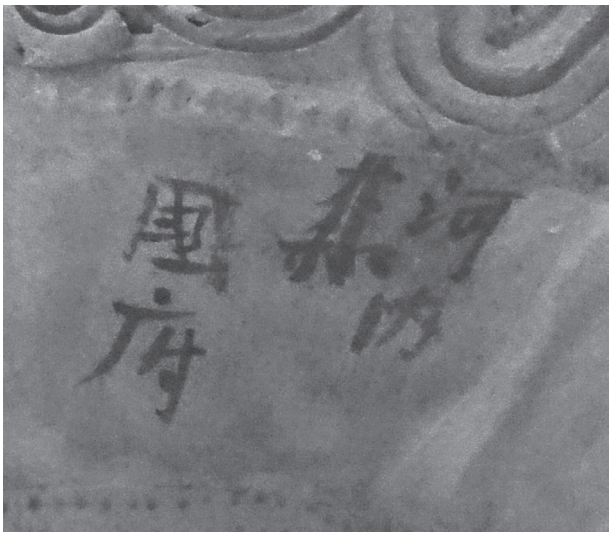


写真９　本山考古資料 0362　口縁墨書